

第4回 おんかつアウトリーチカフェ 報告書

2015年3月17日 於：地域創造会議室

ゲストスピーカー：白石光隆氏（ピアニスト：2期生）

進行：児玉真氏（地域創造プロデューサー）

15年前におんかつを始めたが、その頃はまだアウトリーチの形というものがなかった。とにかく何かをやってみよう、そして、やってみた中から、これはよかった、これはやめた方がよかった、と形を作っていく時代だった。大変な作業だったが、とても楽しい思い出でもある。昨今は全国各地で色々なアウトリーチのセミナー等が開かれ、今までやってきた事例を「勉強する」時代になっている。今日の内容として、音楽における「調性」に関する事例をいくつか取り上げ、それを踏まえた上で、自身のアウトリーチに対する考え方を示したい。

「西洋音楽における調性について」 （参考資料：東京藝術大学作曲科ゼミの資料を引用）

ピアノは1オクターブを12等分した平均律で調律されている。それぞれの音楽にはメッセージがあると思うが、それを「調性」と「動機（モチーフ）の音程」という2点から考えてみたい。例として、ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）作曲の《運命》と《悲愴》を取り上げる。

「ベートーヴェンについて」

1789年にフランス革命が起こり、多感な青年期である19歳の時に社会がすべて変わってしまう出来事に遭遇する。彼はボン大学で学び、レーヴェ教授とシュナイダー教授の講義を聞いたことにより、共和主義の考え方を強く抱くようになる。その後、音楽をとおして社会に対して強いメッセージを送り続けた生涯を送った。

「《運命》について」 （以下、キーボードによる実演を交えて解説）

《運命》も《悲愴》も同じハ短調で書かれている。また、ハ短調で書かれた曲には以下のようなものもある。（ex. ブラームス《交響曲第1番》、ショパン《エチュード「革命」》、ラフマニノフ《ピアノ協奏曲第2番》など）そこから得られるハ短調のイメージとは、現実・力・勝利を得ることができない、得ようとして葛藤している調である。

第1テーマには、タタターンという「運命の動機」、3度下がる音程の「死の動機」が出てくる。そしてこの2つが合わさって全体ができているという構造である。それに対して第2テーマは、4度上がる音程の「憧れの動機」が使われており、これらが絶妙に絡み合っ曲が成り立

っている。また、2 楽章は「憧れの動機」で始まり、3 楽章は「運命の動機」、4 楽章では「死の動機」の反対である 3 度上がる音程の「勝利・生命」の動機が使用される。この動機の「対称と統一」が完璧で、全く無駄がないことがこの《運命》が傑作である理由だと思う。

これらの動機は、ブラームス、シューマン、ショパンなど他の作品の中にも使われており、中でも特にブラームスはよく踏襲している。そして、この曲全体のバランスの良さというものは、実は「社会に対するメッセージ」でもあるのではないか。音楽室の肖像画を見ると、ベートーヴェン以降の時代の作曲家は鬘を冠っていないことが分かる。つまり、彼は王侯貴族の保護を出て自活を求められる時代になった最初の作曲家で、「自由」という考え方をもち、力強い曲を多数生み出した。

「《悲愴》について」

《悲愴》は《運命》と同じくハ短調。ハイリゲンシュタットの遺書を書く約 2 年前から構想していたと言われている。彼自身は普段あまり曲目に標題をつけない人物だったが、この《悲愴的大ソナタ》は自分で標題をつけている。バッハ《パルティータ第 2 番》やチャイコフスキー《交響曲「悲愴」》もよく似た雰囲気曲だが、時代や作曲家が変わっても調性が同じだと伝えたいメッセージが同じなのではないかと感じる。

この《悲愴》で特徴的なことは、3 つの楽章が実は同じ旋律でできているということ。これこそベートーヴェンがとった統一の方法であり、しかもそれを 3 つの表情にしっかり分けて成立させているところが、恐るべき点である。《運命》が違う楽章に 2 つの違うものを盛り込むことで、「テーマの対称」を図ったことに対して、《悲愴》は、1 つのテーマを全ての楽章に統一することで「テーマの統一」を意図したのではないか。ここに、「変化」と「統一」の狙いが見える。

「調性による意味の伝わり方のちがい」

《運命》も《悲愴》も、2 楽章は As dur で書かれている。本来は近親調である Es dur にいくべきところを、この資料で言うところの「1 つ深みを帯びた調」を使うところに、より力強さを感じる。一方、2 楽章に E dur を使う作品も多い。ハ短調 (c moll) との相関関係で考えるととても遠い調ではあるが、遠い調に敢えていくことが行なわれている。E dur は「愛の調」・「深い愛の表現」とあるが、例えばベートーヴェンの 27 番のソナタ 2 楽章、30 番のソナタ 3 楽章は非常に愛情に溢れた調に感じる。ハ短調が勝利を得られない調であることに対して、最も満たされたホ長調にいき、また戻ってくる、というギャップ効果を狙っているのではないか。このように、音楽には調性による意味合いの伝わり方のちがいがある。調性を考えることで、自分の発想が多角的になっていくことがわかる。

「解説の仕方について」

アウトリーチでよく《小犬のワルツ》を弾く。昔の学者的な解説であれば「これは3部形式で、ソラ♭ドシ♭というモチーフが展開していき、難易度は高くないが集中力を必要とする…」というような面白くない文章になる。一昔前のプログラムノートはそうであった。それに嫌気がさしてアーティスト自身を書くようになる。しかし、せっかく書いたのにお客さんにあまり読んでもらえないので、そのことを喋ってしまおう、というのが現在のアウトリーチの形なのかもしれない。

《小犬のワルツ》であれば、このような説明もできる。ショパンの書いたソラ♭ドシ♭（ドレファミ）のモチーフは、実はモーツァルトの書いたドレファミのモチーフを引用している。そして、ブラームスが書いた4つの交響曲全ての調の主音を並べると、ドレファミになっている。ブラームスが4つの楽章でいえたことを、モーツァルトは2小節でいえていた。そして、ショパンはたった2拍でいえた。ブラームスは不器用だが、そこが愛らしい作曲家である。

「ベートーヴェンのメッセージ」

ベートーヴェン晩年の大作《荘厳ミサ曲》は、全て演奏すると約90分かかる。この曲の80分あたりで、聞くとすぐベートーヴェン作品だと分かるような非常にキャッチーなメロディーが出てくる。その部分の歌詞は、'Dona Nobis Pacem'（我らに平和を与えたまえ）。おそらく、これこそが、彼が人生の最後に言いたかったメッセージなのではないか。

「調性の聴き（弾き）比べ」

バッハの平均律や、ショパン、ラフマニノフ、スクリャービンなど多くの作曲家の前奏曲は、24調全調で書かれている。これらの調性を比べてみると非常に面白い。時代と国が変わると調性はどのような感覚になるか、その中でも共通しているものが見えてくるか。音楽の調性によるメッセージが、色々な作品を聴き比べることによって感じられるのではないか。そして、そこから自分が感じる表現の幅が広がってくると良いと思う。

「音楽にはメッセージがある→アウトリーチで何を伝えるか？」

アーティストは、ホール職員の夢を何とか形にしなければならない。そのために、アクティビティとホールコンサートを、それぞれのホールの特徴を活かしながらどのように成立させるか悩んできた。今までやったことの中で、今も生きているものもあれば、一回はやったが二度とやっていないこともある。

自分も含め、音楽家は基本的に怠け者が多いが、極悪人と凶悪犯はいない。それは、やはり音楽に囲まれて生きているからだと思う。社会の求めるものとの違いに苦しんでしまう場合もある。

るが、音楽をメッセージとして受け止めて、それを表現する方法をいつも考えているからではないか。

アウトリーチでは必ず、音楽家や音楽が縁遠いものではなく、身近なものであるということを伝えたい。身近なものであるということと同時に、身近に「素晴らしいものがある」ということを伝えたい。身近だよ、で終わってしまうとつまらない。身近に行くからこそ素晴らしいものが伝わるという瞬間に大きな魅力を感じている。

また、音楽や楽器が楽しいということも伝える。ただし、楽しむためには、長いけれども広い道があることを伝えたい。音楽は「道楽活動」であって、娯楽ではない。長い道のりを楽しむ活動であり、その道のりに乗った人は一生音楽を楽しめるのだと思う。

『何をするか (How to do)』ではなく『どう在るか (How to be)』

アーティストはいつも音楽と向き合い、楽器と向き合い、芸術からはかりしれないメッセージをいただいて活動している。演奏家は勿論、ホールの職員やスタッフは、リスナーにはならず常に発信者側であることを心がけてほしい。芸術から受けた恩恵を伝えること、発信する立場として伝えることの重要性を知ること。芸術の素晴らしさを伝える発信者であってほしいと思う。

そのために、アウトリーチでは、芸術に囲まれているアーティストの「姿」を伝えることが何より重要である。「何をするか (How to do)」ではなく「どう在るか (How to be)」。自分たちが、どう在るべきかという姿を示し、堂々とアウトリーチに臨めば絶対に成功する。

ある弦楽四重奏団が、絶対にショスタコーヴィチの 8 番を小学生に全曲聴かせたいとアウトリーチに臨んだ。そして、大成功したという。おそらく小学生にとっては耳馴染みのない曲であったと思うが、きちんと伝わった。それは、ショスタコーヴィチの音楽から受けたメッセージを 4 人が一様に共有し、そのメッセージを一生懸命伝えたからではないか。つまり、芸術から受けた恩恵を伝えようとしたからだと思う。

「地域創造のおんかつアーティストにしか出来ないこと」

昨今は、世の中にアウトリーチという言葉が蔓延して、簡単に使われているような気がするが、おんかつアーティスト以外のやっているアウトリーチ活動を「アウトリーチ」と呼ぶことに抵抗がある。地域創造アーティストを差別化する新しい呼称をつくってもよいかもしれない、というくらい、地域創造のおんかつアーティストでないと出来ないこと＝「どう在るか (How to be)」を示していく必要がある。

「はなむけの言葉として」

バロックの音楽は「神」に対するメッセージ、古典派の音楽は「社会」に対するメッセージ、

ロマン派の音楽は「人」に対するメッセージ、20世紀以降の音楽は「科学」に対するメッセージ、その融合で今の音楽はできている。問題はどの時代の音楽にも「経済」に対するメッセージがないこと。だが、おんかつアーティストには地域創造がついている。スキルはアーティストそれぞれ。芸術の力を信じて堂々と姿を見せていくことが重要である。

2015/03/17（記録：田辺沙保里）